

## メッセージアウトライン

### コロサイ人への手紙 3:18～4:1 「主にある者にふさわしく」

[18]「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい」 これは盲目的、奴隷的な服従ではない。「主にある者にふさわしく」である。イエス・キリストを信じ新しくされた者にふさわしく夫に従うのである。キリストが父なる神のみこころに従われたように、妻たちもキリストにあって、その模範に従うのである。→I ペテロ 3:1~4

[19]「夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってははいけません」 夫は自分の責任を棚上げして妻に服従だけを要求してはならない。「妻を愛しなさい」と言われている。この「愛する」という動詞は原語では「アガパテ(原形はアガパオーで名詞はアガペー)」ということばで、人間的な感情から出る愛「フィレオー」や性愛を意味する「エロス」の愛ではない。(そのような愛は移り変わり、冷えていくということがある)しかし、このアガペーの愛は神がそのひとり子イエス・キリストを私たちのために十字架にかけることによって示して下さった愛に使われていることばである。→ヨハネ 3:16

その愛で妻を愛するという事は、相手の状況や見返りがあるか否かにかかわらず、絶えず妻の幸福と平安のために配慮して行動に表していくということを意味する。

「つらく当たってははいけません」という勧めも以上のことから当然のことである。男は独裁者や暴君になるために結婚するのではない。

[20]「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです」 信仰者の家庭において子どもを健全にしつけ、成長させ、神を畏れ、神に従うように導いてくのは親の特権であり義務である。出エジプト記 20:12の「あなたの父と母を敬え」ということばもこれと関連がある。従うところには神の恵みがあり、従わない者に対しては厳しいさばきの例が聖書には挙げられている。→出エジプト記 21:17,申命記 21:18~21 もちろんここで言われている両親とは、神を畏れ神に従う両親のことを言っているのであり、子どもを虐待したり、傷つけたりするような親たちにも自動的に当てはまるものではない。

[21]「父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです」

家庭における祝福された生活や規律の問題は、ただ単に子どもを厳しく訓練するだけで解決する問題ではない。16世紀の宗教改革者マルティン・ルターは父親があまりにも厳しかったので「天にいます私たちの父よ」と祈るのが難しかったと言われている。また彼は言う。「鞭を惜しめば子どもを損なう。それは真実である。しかし、鞭のそばに、良いことをした時に与えるりんごを用意しておきなさい」。

クリスチャンである親は自分たちが子どもの人格形成上の教師であること、家庭を形成するために召された者であることをよく覚え、自らが子の尊敬に値する者として成長しなければならない。

[22-24]「奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れかしこみつつ、真心から従いなさい。何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。あなたがたは、主から報いとして、御国を相続させていただくことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです」

パウロは奴隷制度を認めているのではない。しかし、彼は奴隷解放を叫んで政治活動に走らなかった。それは解放後の彼らの生活問題を解決しないで、ただ彼らが解放されても、職などはなく奴隷よりももっと貧しくなり、最低の生活に甘んじなければならなかったからである。それでパウロは単に奴隷解放を叫ぶのではなく、彼らのためにもっと実質的な解決をしようとしたと考えられる。その勧めは22~23節に書かれているとおりである。当時、奴隷は私有財産を持つことはできなかった。しかし、ここでは主に対してするように心から働く者には報いがあると教えられている。また、この地上の財産はやがて古び、腐り、なくなっていく。しかし、クリスチャンにとっては天の御国こそ真の財産なのである。彼らは確かに地上の主人に仕えているが彼らの真の主人は主キリストであり、彼らは地上の主人に仕えることによって実はキリストに仕えているのである。

[25]「不正を行う者は、自分が行った不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません」 神は人を偏り見たり、差別扱いをなさらないお方なので不正に対しては公正なさばきを下される。この取り扱いに対しては奴隷も主人もない。神を信じ新しくされた者は不正なことをしてはならない。

[4:1]「主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい」

ここでは主人は奴隷を物として扱うのではなく、一人の人間として正義と公平を示し、責任ある態度をとることが勧められている。奴隷の主人は自分にも主人が、つまり主キリストがおられることを忘れてはならない。奴隷が神に対して責任を持っているように、主人も神に対して責任を持っているのである。奴隷も主人も主にあって兄弟である。→ピレモンへの手紙参照

以上の箇所を要約するならば、主イエス・キリストを信じ、新しい者とされたクリスチャンは妻であれ、夫であれ、子どもであれ、奴隷であれ、主人であれ、主にある者にふさわしくその責任を果たさなければならないということである。私たちは権利ばかり主張するのではなく、聖書のみことばに従ってその責任を果たしていかなければならない。神は不正を行う者には公正なさばきを下され、みことばに忠実に生きるものには豊かな報いを与えてくださるのである。私たちはこの世にあって主に仕えるように、心からそのなすべき責任を果たしていく者になりたい。